



| | |
|--------------|---|
| Title | <研究ノート>類似性と共通スペース：メタファ理論とスペース融合モデルの観点から |
| Author(s) | 杉本, 孝司 |
| Citation | 大阪外国語大学英米研究. 2004, 28, p. 195-202 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/99287 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

類似性と共通スペース：メタファ理論とスペース融合モデルの観点から（研究ノート）

杉 本 孝 司

はじめに

本研究ノートの目的は、メンタルスペース理論における4スペースモデルにおいてスペースの導入はどのような動機付けにより引き起こされると考えることができるかについて一つの案を出す所にある。今後この案に基づいてメタファ理論とメンタルスペース理論の統合を試みたいと考えているが、あくまでも小論は研究ノートとしてその統合の素案を出すという性格を持ち、必ずしも精確な議論を行うというものではない。以下においては、メンタルスペース理論 (Fauconnier (1985,1997), Fauconnier and Turner (2002) など)、メタファ理論 (Lakoff and Johnson (1980,1999), Grady (1997) など) 及び認知意味論に関するある程度の知識を前提としていることをお断りしておく。

もともとメンタルスペース理論は特にスペースの数にこだわっているわけではない。当初から、例えばいわゆるメトニミに関する写像においては单一スペースのみが問題になっていたし、現実世界の青い目の少女とその肖像画の中での少女との対応では二つのスペース（現実と肖像画）が関連していたし、現実世界の俳優が映画の中で演じる登場人物の信念世界が問題になっている状況では三つのスペース（現実、映画、及び映画の登場人物の信念世界）が関与しているなど、次の各例文（いずれも Fauconnier (1985) から）に見る通りである。

1)

- a. The BLT left without paying.
- b. In this painting, the girl with blue eyes has green eyes.
- c. In that movie, Clint Eastwood is a villain, but he thinks he is a hero.

しかし現実以外のスペースが関与する場合、いずれの場合においてもスペースが導入されることを促す言語表現が（b, c における *in this painting*, *in that movie*, *thinks* など）重要な役割をしている訳で、これらがスペース導入表現（space builders）と呼ばれるゆえんもそこにある。このように確かに「スペースの数」ということにはさほどこだわりを見せないメンタルスペース理論であったが、90年代半ばからの理論の発展、特にメタファ理論を取り込む形での修正・発展の結果と理解できる「スペース融合」という考え方が登場するに至って、意味論・語用論（以下、特に断らない限り、この区別を理論的に重要な区別とせず単に意味論という）のモデルとしてのスペースのあり方が注目されるに至ったと言えよう。周知のごとくメタファ理論においては、メタファは概念レベルでの理解様式のモデルとして、ターゲット概念領域とソース概念領域が非対称的写像関係にあるとしている。この「二つの概念領域間の写像」関係がメンタルスペース理論では「二つのスペース間の写像」関係の観点から捉え直されることになる。メタファ理論における概念領域とメンタルスペース理論におけるスペースとが同じであるとは言えないが、小論では、前者は後者を生み出す効力を持ち得るものであると考える。つまりメタファにおける概念領域はメンタルスペースにおけるスペースの構築を誘導できる一種の「スペース導入要因」としての機能を潜在的に持つものと考えておきたい。もちろん（1）に関して述べた一般的なスペース導入表現の場合と同じく、概念メタファが誘因となるスペースの導入の場合であっても言語表現が同時に重要なスペース発動要因となることもあるだろう。

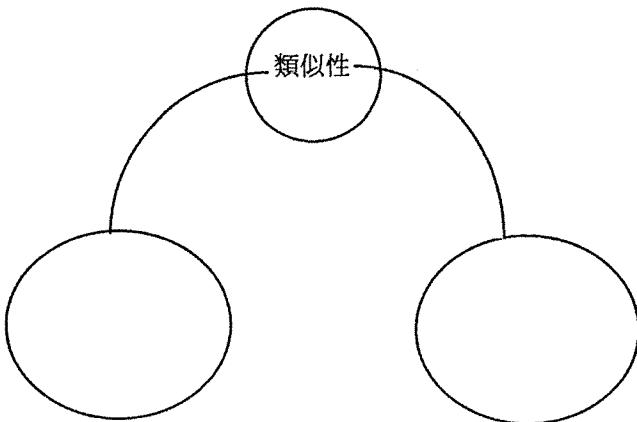
さてスペース融合における二つの入力スペースが必ずしもメタファ専用の道具立てでないことは、「カントとの対話」「レガッタ」その他によく知られ

た例における分析からもあきらかである。これらも含めた形で融合モデルにおいて捉えられているものは、伝統的な意味での「類推」（アナロジー）であると考えたい。そして一見してその積極的意義が見いだしにくい共通スペースが果たす役割はまさにこの類推の基盤となる共通部分を表現する所にあると言える。

共通スペースが二つの入力スペースの共通部分を表現するのであれば、メタファを融合モデルで捉えた場合にも同様のことが言えるわけで、メタファが類似性に基づくと考えた場合、これはごく自然なことである。つまりソースとターゲットに共通する部分、類似する部分がそこに表現されているということになる。もちろんメタファ理論の核心部分として、ソース領域とターゲット領域という二つの概念領域間には何の共通性もないということがある。多くの場合、ターゲットとソースがそれぞれ抽象概念領域と具象概念領域に対応していることからもこれは明らかなことである。しかしそう考えてみると、何の類似性もない、何の関係もない二つの概念領域がメタファ的理解様式のもとに写像関係に入れる、ということ自体不自然なことである。もちろんこのことは「経験的基盤」(experiential basis) という名の下に Lakoff and Johnson (1980) 以来、常に強調されていたことでもある。何らかの基盤があつて初めてメタファ的理解様式も可能となる、とされている訳である。いわゆる不变性仮説 (invariance hypothesis (Lakoff (1990))) が認知トポロジーを維持する、とされることも同様の理解に基づく考え方であろう。確かに Grady (1997) のようにメタファは Correlation と Resemblance という二つの原理によって大きく二分されるとする考え方もあるが、仮に Correlation によるメタファも例えば時間の同時性という視点をとればある種の resemblance の観点から分類できると考えられ、メタファはすべて類似性（何らかの共通する経験的基盤や認知トポロジーなど）に基づく' という主張が可能になると思える。総じて、類似性を捉える、というのは人間の認知能力の中でもかなり基本的かつ重要な能力なのではないかと考えられるが、その能力がメタファやスペース融合に深く関わっていたとしても何ら驚きではないであろう。

今仮にメタファはすべて類似性に基づくものであるという分析が上記のような観点から可能であるとしよう。するとこれは次のようなことを意味するのではないかと現在考えている。アナロジー一般はもとより、メタファにおいても文脈依存型の（つまり慣用化していない）ものはいくらでもあることはよく知られている。まさにこの事実はメタファやアナロジが言語の創造性に深く関わる認知能力であることを示していると言える。これは見方をかえれば、我々人間はいわば常に既知・未知両種の事態把握において、何らかの類似性の観点からそれらを理解する「用意」が常にできていることを意味しているのではないだろうか。つまり、何かを理解する時にメタファやアナロジが関わる場合、そのような複数領域のスペースをすでに用意してくれる認知的道具があると考えられる。このような道具が、概念レベルにおける類似性であり、メンタルスペースにおける共通スペースということになると考えられる。いわば類似性という概念範疇が様々な「個別」の類似点（例えば形、色、イメージスキーマ、スクリプト、同時性、など）の観点から、換言すれば、様々な種類の個別の共通スペースを用意することによって、類似性のネットを張り巡らせているのではないかと考えられる。つまり個々の類似性（に相当する概念）が共通スペースの隠れたスペース導入要素として常に働き、この共通スペースがいわばそれぞれの類似性に関わる二つの入力スペースを潜在的に導入することによって、どのような事態に直面しても何らかの適切な理解様式を提供できるように待機している状況が考えられるということである。形や色やイメージスキーマなどといった類似性概念が、手ぐすねをひいて常に二つのものを関連させようと待機している、とでも言えようか。この「待ち受け」状態を図示すれば次のように描けるだろう。

2)



先に「本研究ノートの目的は、メンタルスペース理論における4スペースモデルにおいてスペースの導入はどのような動機付けにより引き起こされると考えることができるかについて一つの案を出す」としたその案とは、この図で表されているように、個別の類似性により導入された空の入力スペースを持つスペースネットの待ち受け状態が我々の概念システムの中で常に用意されている、というものである。言語表現としての“in this painting, in that movie, thinks”などが overt space builders であるとすれば、この概念システム内におけるスペースネットの待ち受け状態を用意している個々の類似性概念は、covert space builders とでも言えよう。この待ち受け状態が意味していることは「これこれの類似性に関して二つの事態／状況／概念が比較検討の対象にならないか吟味せよ」といったことだとも理解できる。我々の概念システム内には様々な種類の類似性に関してこの待ち受け状態が用意されていると考えられる。どの類似性が選択されるかは対象となる事態／状況／概念の内容次第である。従って、大切な検討課題として、ヒトはどのような点に関して二つのもの間に類似性を見て取るか、という問題を明らかにせねばならないということがあることが分かる²。

メタファ理論とスペース融合モデルの関係では、融合スペースがどのように

な動機で導入されるのかということも重要な問題であるが、この点に関しては、すでに Fauconnier などが何度も述べている立場、つまり融合スペースはフレーム（など）あるいはそれに相当するものが誘発するという考え方、を採用しておきたい。そうすると、4 スペースモデルにおけるスペースの導入は overt なものも covert なものも含めてそれぞれつぎのような要因が絡んでいるのではないかという結論に至る。（以下は特に言語理解／言語産出の区別にこだわっていない。）

3)

- a) 共通スペース <== 類似性
- b) 入力スペース <== 類似性+個々の事態／状況／概念の把握様式や言語表現
- c) 融合スペース <== フレーム（など）や言語表現

もちろん「類似性」というカテゴリ自体はラネカー (Langacker (1999)) のいように具現事例に内在する (immanent) スキーマとしてのみ存在するのかもしれない。しかし、いずれにせよ、メタファ、アナロジを統合し得るスペース融合モデルを考えるにあたっては、各スペースが導入される動機付けを考える必要があると思われ、小論では主に共通スペースに関して、このような動機付けを「事態／状況／概念把握のための待ち受け状態を用意する各個別の類似性概念」に求めることになる（そして、融合スペースではその動機付けをフレームであるとした）。小論は研究ノートであり、カテゴリ概念としての類似性に関しては今後の研究を待たねばならない面も多いことは否定できない。しかし、全体的方向として本研究ノートの考え方方が正しいとすれば、意味論におけるスペース融合モデルの可能性は更に高まることになると考えられる。

[注]

1

すでに sugimoto (2003a, b) で素描したように、現在考えていることの一つに、「類似性」の概念はプロトタイプ効果を有するカテゴリを形成するのではないかということがある。その意味で二つのイベントが同時に起こるということも、我々は何らかの意味で「類似性」の観点から理解できているのではないかと考えている。このことには PROXIMITY IS SIMILARITY. や TIME IS SPACE. などのメタファも関与していると考えられる。

2

Takamori (in preparation) はこの点を取り上げようとしたものである。

References

- Fauconnier, Gilles
1985 *Mental Spaces*. Cambridge, Mass. : MIT Press. Rev. ed. N.Y. : Cambridge University Press, 1994.
1997 *Mappings in Thought and Language*. N.Y. : Cambridge University Press.
- Fauconnier, Gilles, and Mark Turner
2002 *The Way We Think*. N.Y. : Basic Books.
- Grady, Joseph E.
1997a *Foundations of Meaning : Primary Metaphors and Primary Scenes*. Ph.D. dissertation : Univervsity of California at Berkeley.
- Grady, Joseph E., Todd Oakley, and Seana Coulson
1997 Blending and metaphor. In Gibbs and Steen (eds.), 101-124. *Metaphor in Cognitive Linguistics*. Amsterdam : John Benjamins Publishing Company.
- Lakoff, George
1990 The invariance hypothesis : Is abstract reason based on image-schemas? *Cognitive Linguistics* 1-1, 39-74.
- Lakoff, George, and Mark Johnson
1980 *Metaphors We Live By*. Chicago : The University of Chicago Press.
1999 *Philosophy in the Flesh*. N.Y. : Basic Books.
- Langacker, Ronald W.
1999 A dynamic usage-based model. In Barlow, Michael, and Susanne Kemmer (eds.), 1-64. *Usae-Based Models of Language*. Stanford, Cal. : CSLI Publications.

杉 本 孝 司

Sugimoto, Takashi

2003a 「写像制約」について(第28回関西言語学会／神戸市外国語大学)

2003b 「メタファ理論の貢献と今後」(シンポジウム「メタファ理論を考える」日本英語学会第21回大会／静岡県立大学)

Takamori, Rie

(in preparation) *On Similarity.* (Master's thesis ; Osaka Gaidai)